

令和5年度病虫害発生予報第1号

令和5年4月5日
鳥取県病虫害防除所

区分	農作物名	病虫害名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	苗立枯病	—	平年並
		ばか苗病（育苗期）	—	平年並
		イネシンガレセンチュウ	平年並	平年並
	オオムギ	赤かび病	平年並	平年並
		うどんこ病	—	少ない
		網斑病	—	平年並
果樹	ナシ	黒斑病	やや早い	平年並
		黒星病	やや早い	平年並
		赤星病	やや早い	平年並
		ハダニ類	やや早い	平年並
		カメムシ類	やや早い	やや少ない
野菜	ラッキョウ	灰色かび病	平年並	平年並
		ネギハモグリバエ	やや早い	平年並
	ネギ	べと病	平年並	平年並
		さび病	平年並	平年並
		ネギハモグリバエ	やや早い	平年並
		ネギアザミウマ	やや早い	やや多い
	スイカ・メロン	アブラムシ類	やや早い	やや多い

気象予報（抜粋）

1か月予報（4月1日～4月30日：3月30日、広島地方气象台発表）

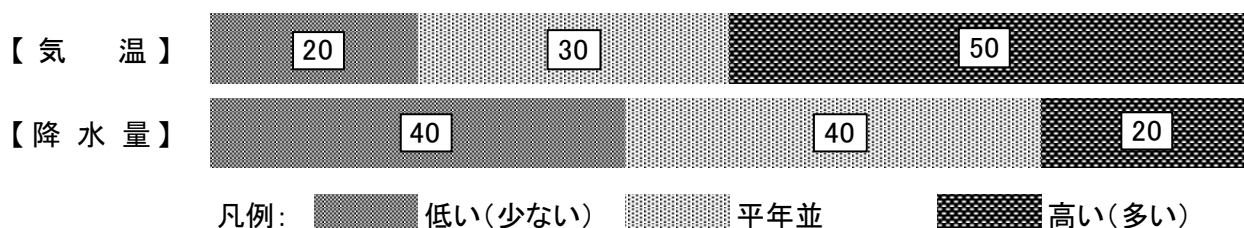
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

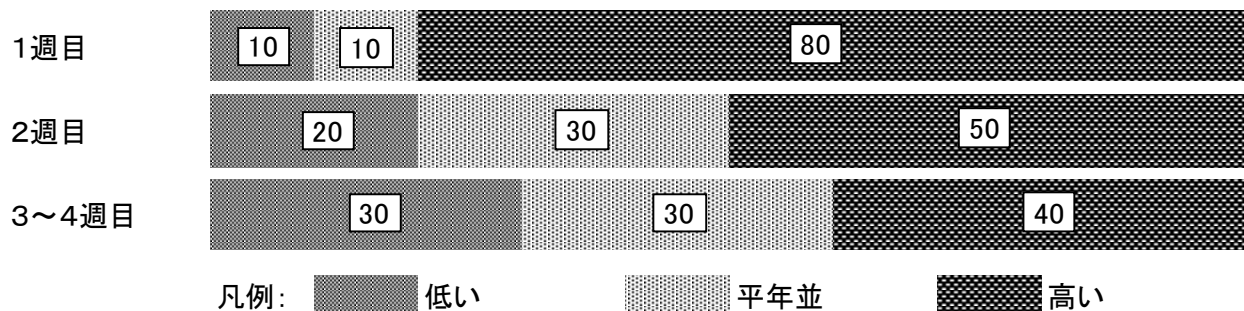
向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率50%です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



普通作物

[イ ネ]

1 苗立枯病

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 苗立枯病の予防防除が広く普及している。
- イ 向こう1か月の気象予報から発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発病後の防除は困難であるため、予防防除を徹底する。
- イ 育苗環境を清潔に保ち、育苗中の温度管理及び水管理に注意する。
- ウ ムレ苗が発生した場合には、タチガレエースM液剤の500～1,000倍液又はタチガレン液剤の500～1,000倍液を箱当たり0.5Lかん注し、夜間の保温と昼間の遮光に努め、苗の回復を図る。移植可能であれば、早めに本田に移植する。

2 ばか苗病（育苗期）

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

前年の発生は平年並であったため、本年用種子の保菌率は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 前年の発生ほ場から採種した籾は、種子として使用しない。
- イ 比重選及び種子消毒を徹底する。
- ウ 温湯種子消毒にあたっては、消毒時間、温度などを厳守する。消毒後の種子を保管する場合には、種子を十分に乾燥させ、清潔な冷暗所に保管する。浸種を行う場合には、必ず水道水を使用し、適宜、水の交換を行う。
- エ 薬剤による種子消毒（低濃度長時間浸漬）にあたっては、薬液がよく浸透するように網袋にゆとりを持たせる。また、薬液の温度が10℃以下にならないように注意する。消毒後の浸種は停滞水中で行い、最初の3日間は水の交換を行わない。水温が高い場合など酸素不足になるおそれがあるときは、静かに換水する。なお、薬剤については、病虫害防除指針などを参考にする。

3 イネシンガレセンチュウ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

前年の本種による葉先枯れ症状の発生は平年並であったため、汚染籾率は平年並と推測される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 前年の発生ほ場から採種した籾は、種子として使用しない。
- イ 比重選及び種子消毒を徹底する。
- ウ 温湯種子消毒については、ばか苗病に準じる。
- エ 薬剤による種子消毒（低濃度長時間浸漬）の場合、ばか苗病防除薬剤と本種防除薬剤の混用により同時防除が可能であるが、各薬剤の使用濃度が異なるため注意する。なお、薬剤については、病虫害防除指針などを参考にする。

[ムギ(オオムギ)]

1 赤かび病

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 二条オオムギの出穂期は、平年並と予想されている。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 六条オオムギは、二条オオムギに比べて本病が発生しやすいため注意する。
- イ 発病後の防除は困難であるため、病虫害防除指針などを参考にし薬剤による予防防除を行う。防除適期は、二条オオムギでは穂揃い期の10日後ころ、六条オオムギでは開花を始めた時期～開花期及びその7～10日後である。

2 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域
発生量 少ない

(2) 予報の根拠

二条オオムギでは本病の抵抗性品種が普及していることから、発生量は少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 感受性品種では、葉色が濃い過繁茂のほ場において多発生のおそれがあるため、注意する。

イ 発生がみられる場合には、病虫害防除指針などを参考にして薬剤による防除を行う。

3 網斑病

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

これまでの気象推移及び向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 葉色が濃い過繁茂のほ場では、多発生するおそれがあるため注意する。

イ 発生がみられる場合には、病虫害防除指針などを参考にして薬剤による防除を行う。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 令和4年11～12月に行った越冬菌密度調査の結果、短果枝の病芽率及び一年枝上の病斑数は平年並、病枝率は平年に比べて低かった。

イ ナシの生育は平年に比べてやや早い。

ウ 3月第5半旬の孢子飛散量は平年並である。

エ 向こう1か月の気象予報から発生時期はやや早く、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 開花期～人工交配終了後に伝染源となる病芽の除去を徹底する。

イ 開花期に病原菌が雌しべに侵入することがあるので、開花前～人工交配直後の薬剤防除を徹底する。

ウ 薬剤は、人工交配終了後にフロンサイドSC2，000倍液又はベルコートフロアブル1，500倍液など、落花期にスコア顆粒水和剤4，000倍とベルコートフロアブル1，500倍との混用液などを散布する。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 令和5年1～2月に行った越冬菌密度調査の結果、腋花芽の病芽率は平年に比べてやや低かった。

イ 昨年の葉における発生量はやや多く、越冬伝染源となる罹病落葉の量もやや多いと見込まれる。

ウ ナシの生育は平年に比べてやや早い。

エ 県予察ほ場（園芸試験場）において、3月第5半旬までの子嚢胞子飛散量は平年並である。

オ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア りん片が長期間残存する花芽は花そう基部病斑を形成している可能性があるため、これらを開花始め～落花期によく観察して切除処分する。

イ 開花期に降雨が続くと多発しやすいので、開花前～落花期の防除を徹底する。

ウ 薬剤は、交配終了後にチウラム水和剤（トレノックスフロアブル又はチオノックスフロアブル）500倍液など、落花期にスコア顆粒水和剤4，000倍とベルコートフロアブル1，500倍との混用液などを散布する。

3 赤星病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（園芸試験場）において、平年に比べてやや早い3月第5半旬に伝染源となる小生子の形成が認められた。

イ ナシの生育は平年に比べてやや早い。

ウ 昨年の発生量は平年並～やや多く、越冬伝染源の量も同様と見込まれる。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果樹園の近くにビャクシン類が植栽され、春季に雨が多い場合に発病しやすくなる。

イ 生け垣などにビャクシン類が植栽されている地域では、本病の発生量が増加する可能性がある。

ウ 例年、冬胞子堆の膨潤と小生子の飛散最盛期は満開前後の降雨直後となるので、この時期の防除を徹底する。

エ 薬剤は交配終了後にチウラム水和剤（トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル）500倍液など、落花期にスコア顆粒水和剤4,000倍液などを散布する。

オ 5月以降に葉の発病が認められるときは、DMI剤（スコア顆粒水和剤4,000倍液、アンビルフロアブル1,000倍液など）を追加散布する。

4 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県内巡回調査園におけるハダニ類の越冬量は、一部地点でやや多かったものの、全体としては平年並であった。

イ ナシの生育は平年に比べてやや早い。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ハダニ類の発生が認められた場合は、カネマイトフロアブル1,500倍液などを単用で散布する。

5 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア クサギカメムシの越冬成虫数（ベニヤ板トラップ、県内10地点調査）は、トラップ当たり4.4頭（前年：8.0頭）と平年に比べて少なかった。

イ ナシの生育は平年に比べてやや早い。

ウ 向こう1か月の気象予報から発生時期はやや早く、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 山間地及び民家近くの果樹園で例年発生が認められる園では、春期の被害が予想されるため、成虫の飛来を注意して観察する。

イ 例年カメムシ類の発生が多い園では、4月以降、定期的にはほ場を見回るなどして、春先の発生量の把握に努める。

ウ 摘果期～小袋掛け期の幼果を加害するので、この時期に果樹園への飛来が認められた場合、直ちにジノテフラン水溶剤（アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤）2,000倍液などを追加散布する。

野 菜

[ラッキョウ]

1 灰色かび病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 3月下旬現在、県東～中部の現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 本病は4月に高温多雨で、5月に低温多雨の条件で発生が増加するが、向こう1か月及び3か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 使用時期に注意し、5月上旬まで、ロブラール水和剤1,000倍液、カンタスドライフロアブル1,500倍液、ベルコートフロアブル1,000倍液、フロンサイド水和剤2,000倍液、セイビアーフロアブル20の1,000～1,500倍液、ダコニール1000の1,000倍液などを輪番で散布する。

イ 降雨後には、枯れた葉の病斑上に多数の分生子を形成するので、降雨後の防除を徹底する。

ウ 本病は白色疫病の発生量が多いと発病が増加する傾向がある。

エ 茎葉が過繁茂となったラッキョウは、株元に薬液がかかりにくい状態となっているので、丁寧に散布する。

2 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 3月下旬現在、現地調査ほ場における発生は認められていない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤はビリーブ水和剤1,500倍液、プレバソフフロアブル5の2,000倍液などを散布する。

[ネギ]

1 べと病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 3月下旬現在、県西部の現地調査ほ場において、本病の発生量は平年並である。

イ 本病は、15～20℃程度の気温で降雨が続くと発病が増加するが、向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病後のまん延は早いので発病前からの防除に努める。

イ ランマンフロアブル2, 000倍液、アリエッティ水和剤800倍液、マンゼブ水和剤(ジマンダイセン水和剤600倍液、ペンコゼブフロアブル500～600倍液など)を予防散布する。

ウ 発病を認めたら直ちに、リドミルゴールドMZ1, 000倍液、フォリオゴールド800～1, 000倍液、レーバスフロアブル2, 000倍液、フェステイバルC水和剤1, 000倍液、シグナムWDGの1, 500倍液などを散布する。

エ 同一成分を含む薬剤は連用しない。また、成分ごとの総使用回数に注意して薬剤を選定する。

2 さび病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 3月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。

イ 本病は冬期の気温が高く、降雨が多いと発生量が増加する。これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 被害葉等は伝染源となるのでほ場の近くに放置しない。

イ 発病後の散布は効果が劣るため、予防散布に重点をおく。発病前や発病初期には7～10日間隔でマンゼブ水和剤(ジマンダイセン水和剤600倍液、ペンコゼブフロアブル500～600倍液など)、ベルコート水和剤2, 000倍液、ラリー水和剤2, 000倍液、メジャーフロアブル2, 000倍液、カリグリーン800倍液、カナメフロアブル4, 000～8, 000倍液、カーニバル水和剤1, 000倍液などを散布する。

ウ 既に多発しているほ場では、アミスター20フロアブル2, 000倍液、ストロビーフロアブル2, 000倍液、オンリーワンフロアブル1, 000倍液あるいは、オンリーワンフロアブル1, 000倍液とカリグリーン800倍液との混用液などを散布する。

3 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 3月下旬現在、現地調査ほ場における発生は認められていない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 土寄せ時にはベストガード粒剤 6 kg / 10 a の株元処理を行う。

イ 散布剤はアグロスリン乳剤 2,000 倍液、ディアナSC 2,500～5,000 倍液、ファインセーブフロアブル 2,000 倍液、グレーシア乳剤 2,000～3,000 倍液などを散布する。

4 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 3月下旬現在、現地調査ほ場における発生時期はやや早く、発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗期後半から定植当日に使用する剤は、病虫害防除指針や各地区の防除暦を参考にする。

イ 本圃生育中のネギに対しては、アニキ乳剤 1,000 倍液、アグロスリン乳剤 2,000 倍液、ディアナSC 2,500～5,000 倍液、トクチオン乳剤 1,000 倍液などを散布する。

[スイカ・メロン]

1 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（園芸試験場、露地ほ場）における黄色水盤への有翅虫の初飛来は、3月31日現在、確認されていない。

イ 3月下旬現在、現地調査ほ場においてアブラムシ類の発生時期はやや早く、発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスの換気部分や出入口には防虫ネット被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止に努める。

イ 葉裏を注意して観察し、初期防除を徹底する。

ウ スイカのハウス栽培では交配前にミツバチへの影響の少ないウララDFの 2,000 倍液を散布し、トンネル栽培ではつる引き誘引時期にチェス顆粒水和剤 5,000 倍液、交配前にモスピラン顆粒水溶剤 2,000～4,000 倍液を散布する。

エ メロンでは、チェス顆粒水和剤 5,000 倍液、バリアード顆粒水和剤 4,000 倍、モスピラン顆粒水溶剤 8,000 倍液などを散布する。

[おしらせ]

**農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、
周辺への飛散には十分注意しましょう。**

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産省の「農薬登録情報提供システム」から検索できます (<https://pesticide.maff.go.jp/>)

なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

<鳥取県病虫害防除所ホームページ>

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>



ホームページ2次元コード

病虫害発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類など）などの参考情報、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしていますので、御利用ください。

<お問い合わせ>

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260

鳥取県病虫害防除所

(TEL：0857-53-1345、E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp)

もしくは

鳥取県農業試験場環境研究室

(TEL：0857-53-0721、FAX：0857-53-0723)

果樹・野菜・花き関係

〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048

鳥取県園芸試験場環境研究室

(TEL：0858-37-4211、FAX：0858-37-4822)

※次回、予報第2号の発表は4月19日（水）の予定です。

なお、予定日と実際の発表日が前後することがありますので、御注意ください。